

## 第 35 回日本保健医療行動科学会学術大会 大会長挨拶

安酸 史子（関西医科大学看護学部）

当事者性に関するテーマを第 34 回学術集会の梓川先生からバトンを受け取り、学術集会のメインテーマを「医療者が当事者性を持つことの意義を問う」としました。本来なら、昨年実施予定でしたが、Covid-19 の影響で 1 年延期となり、オンラインでの実施となります。この 1 年で、当事者性の意味がすべての人にとって他人事ではなく、自分事になった気がします。たとえ自覚症状がなくても、自分が陽性者である可能性があることを自覚して感染予防行動を徹底する「患者役割行動」を強制的に求められました。医療者が患者に当たり前のように求めていたことを、医療者側も突き付けられたのです。



本大会では専門家として当事者に巻き込まれることは悪なのか必然なのか、当事者性を持つ専門家とはどういうことを意味するのかについて、専門家の視点、当事者の視点、当事者を支える家族の視点などから多面的に検討していきたいと考えています。さらに巻き込まれることを推奨しすぎることの弊害などの切り口でアカデミックな視点からも当事者性を問うていく大会としていきたいと考えています。

私は個人的には医療者が患者さん（当事者）にセルフマネジメント支援をするためには、当事者に巻き込まれる勇気と覚悟を持つことが必要と考えています。当事者にしか分からないことがあることを認識し、専門職としての知識とスキルをセルフマネジメント支援のために使うコンピテンシーを高めていく必要があると考えています。

「当事者性を持つ医療者」とは、病気の当事者である医療者ということではありません。対立概念は「第三者としての医療者」です。第三者としての冷たい印象の医療者ではなく、的確な専門的な知識とスキルを持ち合わせたうえでの温かみのある当事者性を持つ医療者が増えてほしいと願っています。コロナ禍に遭遇し、当事者性を突き付けられる経験をした今だからこそ、参加される方一人一人がそれぞれの立場で、医療者が当事者性を持つことの意義について改めて考えていただけることを期待しております。